

日本語母語話者の体験談の語りについて

——談話に現れる事実的な「タラ」「ソシタラ」の機能と使用動機——

加藤 陽子*

キーワード: 話し言葉, 体験談の語り, 事実的な「タラ」「ソシタラ」, 使用動機, 情報の言語表現化

要旨

本研究は、過去に発話者自身が体験した出来事について語った談話(体験談の語り)の特徴を明らかにしようとしたものである。テレビ番組から採録した、日本語母語話者による体験談のデータ分析を行い、そこに現れる接続辞・接続詞(具体的には、述語のテ形・末尾にデのついた接続詞に次ぐ頻度を持つ「タラ」「ソシタラ」)を対象に、その機能と、使用動機について考察した。そうした考察を通じて、情報とそれが言語化されたものとの関係を探ろうとした。

まず、「タラ」「ソシタラ」の統語的・意味的性質を確認し、次に、先行研究を元にこれらを四つの用法(発見・発現・反応・連続)に分類した。そして、これらの前後件の述語のアスペクトに反映されている情報構造(前景/後景情報)に着目して考察を行った。

発見用法については、前件動作との関連性を表示しつつ、後件の認識主体の視点を通して背景を更新するのが使用動機であると述べた。発現用法については、注目動作が始動することを劇的に描写する機能があり、この用法の使用が、発話者の談話構成の意識を反映していることを指摘した。また、反応用法の機能は、主語転換を伴う継起的動作を叙述することで、最も頻繁にそれが使われる場面として会話部分の描写が挙げられると指摘した。また、連続用法については、完結性のある動作をつなぎ前景情報を作る述語のテ形と比較し、「意外性」という「評価」を示しつつ出来事を叙述するという機能が、テ形にない独自のものであることを述べた。また、この意外性という心的態度の表示機能は、これら4用法全てが持つものであり、後件述語のコントロール不可能性という「タラ」「ソシタラ」の統語的・意味的性質に基づくものであることを述べた。

最後に、この「命題の叙述と評価を同時に行う」という性質こそが、事の顛末まで全てを知る話者が、体験談の語りの中でこれらを使う最大の使用動機であると主張した。

1. 研究動機と研究対象

私達は、以前自分が体験した出来事について語る場合がある。それは、子供の頃の戦争体験の

* KATO Yoko: 東京大学大学院総合文化研究科博士後期課程。

ように、多くの聴衆の前で記録・伝承の意味合いを持ってなされるフォーマルな場合もあるが、友人との雑談の途中に、笑い話や失敗談として、共感を得るために披露する場合もある。特に後者のような体験談の語り¹は日常的に行われており、とりたてて珍しいことではない。帰宅後、家の人に一日の出来事を話したり、テレビのトーク番組で、ゲストが聴衆に体験談を披露したり、誰かに何かを頼む際に、頼むことになった経緯を説明したりすることは、私達が日常的に見たり聞いたりしていることである。

このように、体験談を語るということは、母語話者が行うありふれたことであるが、言語能力が十分でない学習者にとっては、時に困難である。中級中期程度の日本語学習者と雑談をしていると、学習者が笑い話のつもりで披露した体験談の内容が明確でないため、笑えない場合がある。また、「依頼」を目的としたロールプレイを行った際、「申し訳ありませんが～していただけませんか」等の依頼の特定表現は使えても、その依頼をすることになった事情を明確に説明することができない場合がある。学習者が、目標言語で適切に体験談を語るができるようになるには、何を学ばねばならないのだろうか。

こうした「体験談の語り」ができない理由は様々考えられるが、学習者は主に三つのことを学ぶ必要があると考えられる。一つ目は、「語り」そのものが、どんな性格を持つものか知ることである。Labov (1972) の定義によると、narrative は、「時間的な連結点 (temporal juncture) でつながれた二つ以上の物語節 (narrative clause) から成る談話」である。つまり、narrative とは、時系列に進む完結した二つ以上の出来事の連続として捉えられている。本稿でいう「体験談の語り」も、Labov (1972) のいう narrative に含まれるものであるが、まず、学習者は、「机の上に本があります。本の隣にペンがあります。」式の、状態の叙述を重ねた談話とは違い、時間的な限界点をもつ動作の連続が時間的推移を表し、話の筋を推し進めるものとなることを理解しなければならない。

二つ目は、こうした体験談の談話を構成する「型」を知ることである。Labov and Waletzkey (1967) は narrative には構造があるとし、それが一定の順序で配列されていると指摘した。具体的には、① 話の概要を示す Abstract, ② 登場人物や場所・時間などを表す Orientation, ③ 主要な出来事である Complicating action, ④ 話者の感情や「話をする」という行為自体の意

¹ 本稿では「体験談の語り」を、Labov (1972) の narrative の一つとして位置付け以下のように定義する。以下の定義の「また」以降は Labov (1972) の narrative の定義に依拠している。

「本稿における『体験談の語り』とは、インターアクションがある場面で生起する、発話者が直接体験した過去に発生した出来事を、一人で叙述した談話である。また、これは、時間的な連結点でつながれた二つ以上の物語節から成る談話である」

また、本稿でデータとした体験談は、テレビのトーク番組(ゲストである芸能人に司会者が話を聞く、インタビュー形式のもの)から取ったもので、相互作用(対話)の中に一人語りの体験談が埋め込まれたものである。「体験談の開始部・終了部」については、以下4点を考慮して認定し、認定された範囲のみを考察の対象とした: ① ターン交替, ② 話題のまとまり(体験談部分の話題が、先行/後続する談話の話題と明らかに違うこと), ③ 発話者の語りの自発性(同じ話題でも発話者が自発的に語りをやめ聞き手の質問等に答えているだけの場合は、語りが終わっていると認定), ④ 談話標識(李(2000)の研究結果の援用)。

味付けを説明する Evaluation, ⑤ 事の結末である Result or Resolution, ⑥ narrative を締め括る Coda, の六つである。Labov (1972) では、最も重要な要素は、物語節に加え evaluation であるとの指摘があり, evaluation はいつも定位置(4番目)に現れるのではなく, narrative のどの位置にも現れるとされている。更に, Labov (1972) では, 上記の様な構造はよく整った narrative に現れるものを単純な形式で示したもので, 実際の談話は Complicating action の部分だけだったり, 逆にもっと複雑に入り組んだり埋め込まれたりしたものだったりして, 様々な narrative があることが示唆されている。しかし, ある程度共通したこのような「入れるべき情報の種類」とその「配列順序」がわかれば, 学習者は, 体験談を構成するのにどんな情報が必要で, それをどう並べれば一般的な narrative になるのかという談話構成の基本的な点に関し, 指針を得ることができる。

本稿では, 三つ目に学習者が学ばねばならないこと——「選択した情報を当該言語のどんな言語要素を使って表現するか」——について中心的に考察を進めていきたい。このような情報の言語表現化は, 対象とする言語によって異なっていることが, 先行研究でも明らかにされている。絵本の内容を口頭叙述した5言語の narrative を比較した Berman & Slobin (1994) 及び Slobin (1996) は, narrative の場面が構成要素に分析され, 様々な種類の節の構造にコード化されることを packaging と呼び, 「通言語の観点から見れば, それぞれの言語は, narrative において packaging 効果を達成するために好まれる手段をそれぞれ持っている」と述べている。つまり, 描写したい場面から取り出した情報を, コード化(言語表現化)する場合, どんな手段を使うかは, 言語による「好み」があるというのである。ここでは, relative clause 等の文法的手段の「好み」が, 英・独・スペイン・ヘブライ・トルコ語の5言語を対象にして分析されている。更にこのような Slobin らの研究を踏まえて行われた Fujii (1992, 1993) では, 特に節接続の文法手段に注目し, 事象を言語表現化するために好まれる節接続の手段において, 日英語間でも「好み」の異同が認められることや, 時には一方の言語で複文で言語化される事象が他方では単文で言語化されるという packaging の好みの違いも認められることを示している。このような研究は, 目標言語に特徴的な文構成・談話構成の仕方を学ぶことが, 体験談を効果的に語るために重要であることを示している。

こうした研究を踏まえ, 本稿では, 母語話者の体験談を観察することを通して, 情報の言語表現化について考察してみたいと考える。具体的には, データ分析により明らかになった, 母語話者の体験談に多用されている言語表現に焦点を当て, その使用動機を探るという方向から, 情報と言語表現との関係を考察する。対象とすべき表現は様々あろうが, 本稿では, 特に, 節と節を結ぶ接続辞², 文と文を結ぶ接続詞に焦点を当て考察を行ってみたい。これらを選択するのは, こ

² 本稿での「接続辞」とは, 基本的に, 節と節を結ぶ働きを担う「接続助詞, 述語のテ形・連用形, 名詞性の時間を表すもの(～る時に / うちに等), 連語的な辞(～ものの等)」などを総称したものである。

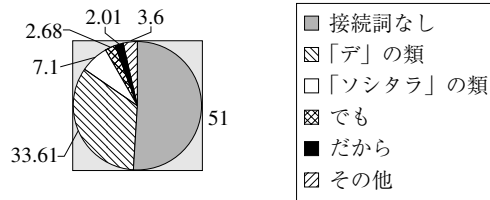


図1 体験談に使用された接続詞と頻度 (%)

うした節同士・文同士を結びつける形式とその使用動機を明らかにすることで、選択した情報をどのように関連付けているのかという、場面を選別しそれを「つなぐ」発話者の意図が明らかにできると考えるからである。このように、本稿では、実際に母語話者により選択された接続表現という「言語表現」の方から、その表す情報を吟味することで、情報と言語表現の関係を捉えていくことを試みる。

次節では、日本語母語話者による談話データを分析し、体験談を語る際に使用されている接続辞・接続詞の種類と頻度を観察する。

2. 日本語母語話者の体験談の語りに使われる接続辞・接続詞

本稿では、テレビのトーク番組から採録した46種類の体験談の談話資料(合計約125分)を対象に、接続辞、接続詞の種類と使用頻度を調べた。聞き手との相互作用もあるため、それぞれの体験談の長さはまちまちで、聞き手とのやりとり・相槌等も含め、長いもので4分、短いもので20秒程度の資料である³。

頻度を調べるに際して、まず、体験談の談話を主に意味のまとまりの面から、書き言葉の「文」に当たる単位に分けた。本稿ではこれを「発話文」と呼ぶことにする。また、本稿では、「発話文」を、述語を一つだけ持つ、書き言葉でいうと単文相当の発話文(便宜上「発話単文」と呼ぶ)と、複数の節が接続辞によってつながれている副詞節・並列節の複文相当の発話文(同、「発話複文」)に分類した。

まず、発話文同士を連結する接続詞について観察する。上の図1は、データに現れた747の発話文を対象に、発話文頭に使われている接続詞の種類と使用頻度をまとめたものである⁴。

³ 資料は、1999～2001年に放映されたテレビトーク番組等(「おしゃれ関係」: 日本テレビ、「ごきげんよう」: フジテレビ、「徹子の部屋」: テレビ朝日、「ミュージックステーション」: テレビ朝日、ゲストとのトーク部分を使用)から採録したものである。紙幅の関係上、データの詳細は割愛する。なお本資料では、脚注1で述べた4点によって規定された体験談の範囲の中で、聞き手への相槌や発話に対する反応と見なされる箇所は除いた。

⁴ 発話文の冒頭に異なる種類の接続詞が複数連続して出てくる場合は、言い直しをしていると考え、一番最後に出てきた接続詞だけをカウントして、その他の接続詞は除外した。

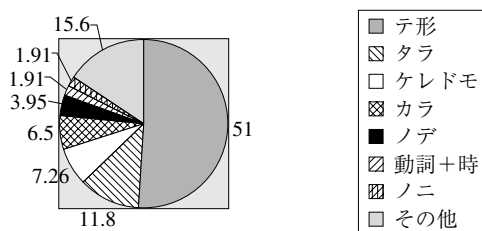


図2 体験談に使用された接続辞と頻度 (%)

図1からわかるのは、接続詞の中でよく使われているものは、種類が限られているということである。発話冒頭に接続詞が全く使われていない発話が51.0%と半数を超えるが、それ以外では、「デ」が語末についた接続詞が多数を占める(図では、「で(23.16%)」「それで(4.82%)」「そんで(0.27%)」「んで(0.54%)」「ほんで・ほいで(2.68%)」「そいで(2.14%)」を一つにまとめてある)。「デ」の類を取り上げた先行研究(有賀1993, 林1999)では、ただ時間の経過に従い、先行文を前提として後続文をつなげていく用法が指摘されており、これは体験談の語りに必要な「時系列に進む完結した二つ以上の出来事の連続」を表現するための一つの言語形式に当たると考えられる。しかし、先行研究ではそれ以外の用法が存在することも明らかにされており、(本稿ではこれらについて詳細に分析する準備はないが)その多様な用法を丹念に観察することは今後必要であると思われる。

また、「デ」の類以外では、「タラ」を使った類(「そしたら・したら・ほんだから」等: 以下、「ソシタラ」で代表させる)が多いことも特徴的なことである。しかし、それ以外には頻度の高いものはなく、1%以上の頻度があるのは、「でも」「だから」の僅か二つのみである。

以上図1から、体験談の談話において、発話文を連結するのに話者がよく使う接続詞は、数種類に限定されていることがわかった。では、複数の節を持つ発話複文の場合、節と節はどのような接続辞で結ばれているのだろうか。発話複文に使われている計785の接続辞の種類と使用頻度を調べたものが上の図2である⁵。

図2からわかるのは、接続詞同様、よく使われる接続辞は、種類が限られているということである。節同士の接続のために使われている785の接続辞の中で、出現頻度が10%以上のものは、「述語のテ形」「事実的なタラ」のみである。このうち51.0%と、半数以上を占めている述語のテ形には、南(1974)で挙げられているように、主節に対する従属性・意味の違う少なくとも4種類のテ形があり、用法を検討しない数だけの単純な比較はできない。今回はテ形を用法毎に分けて検討する余裕はないが、資料を概観するに、継起的な動作連続を表すテ形が多用されていると

⁵ 図2では、接続辞が使われてはいるが後件がなく、中途終了発話文になっているものはカウントされていない(例えば、5.資料の49・56等)。

いう印象をうける。実際、テ形接続の400節中、述語に時間的限界性のある動詞が使われている例は294例(73.5%)にのぼった。それ以外で注目できるのは、テ形に次ぐ割合で使われている事実的な「タラ」くらいである。

3. 本稿で注目する表現

体験談は、過去の出来事を時系列に並べ、話者の評価を織り込み、聞き手に提示するものである。ここで考えてみたいのは、継起的な出来事を結びつけ、主要な部分を描写するのならば、「テ形」による節の連続(及び、「デ」類等の接続詞による、先行・後続発話文の関係付け)で十分であるはずなのに、なぜそれ以外の接続辞や接続詞——例えば「タラ」「ソシタラ」——が使われているか、ということである。データを見ると、対象とした46種の談話のうち40の談話に「タラ」、「ソシタラ」の両方、あるいは片一方が現れ、頻度としては「テ形」「デ」に次いでいる。ここから、「タラ」「ソシタラ」が、テ形やデ類の接続詞とは異なる場面と場面の関係性を表示するための言語手段として、使われているのではないかと推測できる。この「タラ」「ソシタラ」は何をつなぐために、どんな使用動機の下に使われているのだろうか。その機能・役割を明らかにすることは、日本語の「体験談の語り」という談話の性質の一面を明らかにすることにつながると思われる。

次節では、これらの機能と使用動機を明らかにするために、まず、タラ・ソシタラの統語的・意味的性質について考察する。そして更に、その性質が体験談の語りの構成にどう反映されているか、という観点から考察を進める。

4. 「タラ」の統語的・意味的性質

本節では接続辞「タラ」、接続詞「ソシタラ」の統語的・意味的性質を簡単に確認する。

本節の記述は接続辞「タラ」を対象としたものであるが、本稿では、一部の点⁶を除いては接続詞「ソシタラ」が接続辞「タラ」と同様の性質を持っているとみなし、考察を進めている。

タラは条件を表す接続辞であるが、体験談でよく使われているのは、事実的ないわゆる「確定条件のタラ」である。これについては、同様の事実的な「ト」を扱った Fujii (1992)、「ト」との比較において「タラ」について考察した蓮沼(1993)、前田(1998)などの優れた先行研究がある。本稿では Fujii (1992)の「ト」の分析を元に、対象とした46種類の資料の観察から、以

⁶ 接続詞「ソシタラ」と接続辞「タラ」の違いは、前者は発話文同士をつなぐものなので、先行発話文の述語に、動詞のみならず形容詞・「名詞+だ」なども位置できるということである。例えば、「誰も来そうにない雰囲気だったんです。そしたら、30人ぐらいの子供がダーってやってきたんです。」は可能だが、「誰も来そうにない雰囲気だったら、30人ぐらいの子供が…」は許容されない。

下の2点を「タラ」の基本的な統語的・意味的性質として挙げておく。

(ア) 主節の述語は、従属節の主語がコントロールできない出来事・状態である。

(イ) 従属節の主語と主節の主語は異なるものが選ばれやすい⁷。

また、「タラ」の用法分類を以下表1のようにする。これは、先行研究の Fujii (1992), 蓮沼 (1993), 前田 (1998) 等の研究成果を基に、反応用法の項に若干補足を加え、表にまとめたものである⁸。表中の例は作例で、用法名は前田 (1998) に倣った。以下、便宜上、従属節(ソシタラの場合は先行文)を「前件」、主節(同、後続文)を「後件」と呼ぶ。

なお、データに出現した「タラ」「ソシタラ」の例126例中、発見用法は36例、発現用法は10例、反応用法は59例、連続用法は21例であった。

5. 資 料

本節以降、資料とした46種類の談話の中から、以下の体験談を例として取り上げ、「タラ」「ソシタラ」の談話上の役割を観察する。以下に示すのは、実際の談話から、聞き手の相槌、話し手と聞き手の相互作用の部分を除いたものである。斜線 (/) は、「発話文」の節の区切れ目を指し、下線付き句点と二重斜線 (. //) は、「発話文」自体の区切れ目を指す。また、節の先頭には、通し番号をつけた。「タラ」「ソシタラ」は で囲み、どの節とどのような関係の意味を結んでいるかを直後の括弧内に記した(例えば、05の直後の「05-07 発見」は、05と07の間に「発見」という関係の意味が存在すると判断したことを示す)。また、 ϕ は、述語が省略されていること、 $\times\times$ は聞き取れなかったことを表す。また、節の順番が意味的に先行節と逆で、後置されたものは \leftarrow で示した。わかり易くするため、発言の引用部には鉤括弧を付し、ポーズがあると思われる箇所(筆者の判断)には、読点を打った。なお、** は中途終了発話文(途中で話者が話を止めてしまったり、聞き手のコメントなどが挿入されたりして、接続辞で発話文が中断したものを)を表す。

⁷ 本稿で対象とした「タラ」「ソシタラ」の例で、資料に現れた計126例のうち、前件の主語がコントロールできる後件を持つものは、1例だけであった。これは、話し言葉に見られる不整文や言い誤りである可能性もあるため、本稿では例外と捉え、(ア)のように規定した。また、(イ)の主語の異同に関しては、4用法中、同主語となるのが連続用法のみで、理論上、全体の4分の3は異主語であり、また、実際上記の126例中、同主語(つまり連続用法)は21例(16.7%)、異主語(残りの3用法)は105例(83.3%)であったことから、大多数が前後件で主語が交替するものであると認定した。

⁸ Fujii (1992) では、従属節—主節の述語のアスペクトが両方とも状態(durative)である「ト」の構文(「家中を必死に探していると、やっと(パスポートは)ありました」等)も挙げられており、タラにも同様の用法が存在する可能性はある。更に Fujii (1992) では、同じ、状態—状態のアスペクトの組み合わせを持つ「昨日通りを歩いていると雨が降っていた」のような文は非文で、その説明には、述語のアスペクチャルな性質だけでなく、「事象構造に関する背景知識」も必要であると述べられている。しかし、資料に現れたタラ・ソシタラ計131例中、同用法の例が5例しか見つからなかったことから、この用法は本稿では除き、残り126例を考察の対象とした。

表1 事実的な「たら」の用法

用法名	前後件の関係の意味の内容	前後件の主体(主語)の異同	前件—後件の述語のアスペクト ⁹
発見	前件の行為によって後件の状態が認識される。 例) 電車に乗ったら、ガラ空きだった。	異主体(後件の認識主体は前件主語に限られる)	動作—状態
発現	前件の継続的な状態が存在している状況で後件の事態発生が認識される。 例) 寝ていたら、部屋に蜂が入ってきた。	同上	継続的状态—動作
反応	前件の動作や変化に反応して後件の動作や変化が起こる。 例) 大声を出したら、子供が泣いた。 あるいは、前件の動作や変化に無関係な動作や変化が、時間的に連続して後件で生起する。 例) 店に入ったら、携帯が鳴り出した。	異主体	動作—動作
連続	第一の動作・変化に連続して同一主体が第二の動作・変化を起こす(後件述語は「生理的動作・感情・思考・非意図的/受動的動作・可能/不可能」といった無意志的な意味の動作の場合のみ ¹⁰)。 例) 手紙を出したら、「もうつきまとわないで」と言われた。	同一主体	動作—動作

01: あの日はですね、何か京都にお休みで京都に遊びに行くつもりで / 02: 朝早くから寮を出て / 03: 一人で行ったんです / 04: で、京都でおいしい物を食べて何かぶらっとして気分転換しようと思って← . // 05: でその電車に乗っ[たら]ですね (05-07 発見) / 06: 平日だったんで / 07: えっと割とそのひとつ一車両に数人しか座ってなかったんです. // 08: でのっそのおじさんが乗ってきた、の、がものすごく印象的で / 09: そのおじさんが何か変だと思った. // 10: でこのおじさん何か変だと思って / 11: そのおじさんが乗ってきた駅と乗ってきた時間を覚えてるんですよ. // 12: でその人が座った位置も全部覚えてるんですよ / 13: 動くたんびに見てて←. // 14: で一杯こう席が空いてるはずなのに / 15: このよっぽらったおじさんの隣に座ったんですよ. // 16: もうそれでこそもうおかしいと思うでしょう. // 17: これは本当におかしいと思って / 18: ずーっとうやっ / 19: 見てたんです. // 20: [そしたら] (19-21 発現) そのおじさんが酔っ払ったおじさん、との間にこうポーチが置いてあって / 21: 酔っ払ったおじさんのセカンドバッグがそれをねポーンて落としたんですよ、電車が揺れるのとおんな

⁹ 表1の当欄で使用している述語のアスペクトを表す言葉の説明は、以下の通りである: 「動作」とは、完結した、時間的限界点がある動作であり、Perfective にあたるものを指す。また、「状態」とは、時間的限界点がなく、一定時間持続するものを指す。これは、進行中の動作 (imperfective)、結果継続 (perfect)、形容詞や「名詞+だ」で表される時間的限界がない状態、全てを含む。また、「発現」の項にある「継続的状态」とは、「状態」の中でも、進行中の動作 (imperfective) のみを指す。ただし、接続詞「ソシタラ」の場合は、脚注6でも述べたように、先行発話文の述語が動詞だけに限られていないため、進行中の動作だけでなく、形容詞や「名詞+だ」で表される時間的限界がない状態も、前件述語として位置することができる。

¹⁰ この後件述語についての観察は、前田 (1998) による。

じに。// 22: んで落として、/ 23: 私はそれを見てただけどチラッと / 24: で「あ、オッチャン、あ
 かんてえ」って言いながら / 25: その拾ってあげる振りをして / 26: そこに置きました。// 27: 置いて
 / 28: 人の影にしといて / 29: それをね後ろをこう通して / 30: 自分のジャケットに入れたんですよ。//
 31: もう――全部見たと思って / 32: すぐに駅を降りて / 33: あの一今おごえで桂、駅、京都の
 方の桂駅の、に行つて / 34: 車掌さんに「スリ見ました」って言っ[たら] (34-35 連続) / 35: ちょっちょ
 「車掌室に来て下さい」しゃちょうあ「車掌室に来て下さい」って言われて / 36: 車掌室に行ったんで
 す。// 37: [そしたら]、(36-38 反応)みんなそこでね 5 人ぐらいの駅員さん、と共に従えて / 38: 階段
 を降りてきましてですね、G メンのように**。// 39: で「どこですか」って φ / 40: パーッと中を探し
 [たら] (40-41 発見) / 41: その特急とのこう乗りかえでとまってたんですよ何分間か。// 42: で
 「あっここですここです」「あっあの人です」って言って / 43: 「この人ですね」って言われて / 44: 「はい
 っ」って言って / 45: みんなで 5 人でダァって乗って行って / 46: 「オッチャン、ちょっとすいませ
 ンけどお話を聞きたいんで駅長室来てくれますか」って言っ[たら] (46-47 反応) / 47: パッって立ち上がっ
 て / 48: 「何のことや」って始まったんです。// 49: ああヤバイと思って**。// 50: 「イヤ、あんあな
 たが、他のお客さんの荷物を盗るのを見た人がいる」と φ。// 51: [したら]、(50-51 反応)パッって、
 ジャケットをパッってやって / 52: 「どこにあるんじゃコラ」って始まったんです。// 53: でもないじゃ
 ないですか。// 54: ヤバイと思って**。// 55: で、でもそのおじさんがパーって見回し[たら] (55-
 56 発見) / 56: 駅員さんの間に、あたしが一人ぼつんと立ってるもんだから**。// 57: んでパーッと
 私んここにやってきて / 58: 「コラこのガキはワレか」って言って**。// 59: ヤバイ。// 60: でもク
 ラクラっとしたんですけど / 61: このしょ至近距離「お前かー」って言われたたんです。// 62: そい
 であたしも、あたしももうヤバイと思いながら / 63: でも私は見た、あんたが悪いと思って / 64: 「見た
 んだよ」って言ったんで××。// 65: 「見たんだよあんたが盗るの見たんだよ」って言った。// 66:
 [したら] (65-66 反応)オヤジオヤジさん(笑)オヤジさんが「コラこのガキやー」って言って / 67: もう
 こう近づいて来たんです。// 68: でもう絶体絶命と思って[たら] (68-69 発見) / 69: 駅のホームにい
 た駅員さんが、あの一ゴミ箱を探して / 70: ゴミ箱にポーチを見つけて / 71: 「このポーチですか」って
 叫んだんです。// 72: でここにおじさんがいて / 73: あたしがここにいて / 74: パッって「そのポーチ
 で一す」って××。// 75: そう××おじさんが黙っちゃった××。// 76: そんでそのポーチを持って
 / 77: 駅員さんが今もう拘られたはずなのに今も寝ている酔っ払いのおじさんを起こして / 78: 「オッチャ
 ン、オッチャン、これオッチャンのかいな」って言っ[たら] (78-79 反応) / 79: 「あーそれわしんじゃ
 あ」って φ / 80: 「オッチャン寝てる場合ちゃうで」って言って / 81: 駅員さんが起こしてですね / 82:
 連れて行って**。//

〈日本テレビ「おしゃれ関係」2001. 1. 28 話し手: 天海祐希「電車内でスリを捕まえた話」〉

6. 「体験談の語り」における「タラ」「ソシタラ」の機能

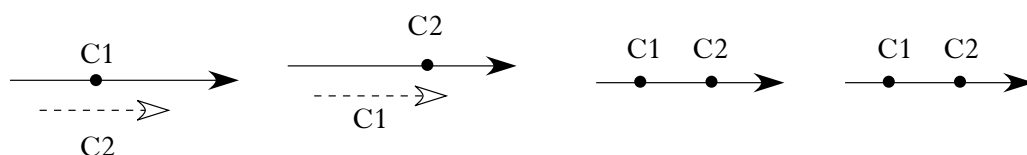
6-1. 談話の情報構造と「タラ」「ソシタラ」

先に 1. で、narrative とは、時系列に進む完結した二つ以上の出来事の連続として捉えられることを確認した。時間的な限界点をもつ動作の連続は、時間の推移を表し、話の筋を押し進めるものとなるのである。この、「時間的な限界点を持つ」「完結した」動作が話の筋を作る、という考え方は、動詞のアスペクトが持つ談話機能に注目した Hopper (1979) や工藤 (1995) により、明らかにされている。

Hopper (1979: 216) では、動詞のアスペクト形式である perfective, imperfective が表示する事態の特徴が記述されている。それによれば、前者は動的な、限界点のある動作を表し、その連続は時系列に沿った出来事の連続を表し、話の主な出来事を叙述する部分(前景情報)を作る談話機能を担うという。また後者は、静的な状態を表すことで、他の出来事と同時、あるいは重複する状態を表示し、主な出来事の叙述には関わらないもののそれを補足する部分(後景情報)を描写する機能を担うと説明されている。一方、アスペクトが持つ、タクシスというテキスト構成的機能について、日本語を対象に詳細な記述を行ったのが工藤 (1995) である。工藤 (1995) では、形式と(基本的・派生的)意味、テキスト内での機能の関係が、実例と共に非常に綿密に記述されている。大まかにまとめるならば、工藤 (1995) では、パーフェクティブ(「スル」「シタ」)は、継起性というタクシスを持って出来事の連鎖を描写し、話の筋を前に進め、一方、インパーフェクティブ(「シテイル」「シテイタ」)は、「同時性」というタクシスを持って、ある出来事に共存する同時的な出来事を表すと述べられている。また、ある時点以前に実現した運動の効力を示すパーフェクト(「シテイル」「シテイタ」)は、後退性というタクシスをもち、先行する出来事を導入するとされている。工藤 (1995) では、前景・後景情報という用語は使われていないが、これを使って述べるならば、パーフェクティブは前景情報を、インパーフェクティブとパーフェクトは後景情報を表すと考えられていることがわかる。以上のように、Hopper (1979) でも工藤 (1995) でも、完結性のある動作の継起的な連続は、話の筋を前進させる前景情報となり、状態性の動詞は、他の動作と同時に存在しその背景となる情報になる、と捉えられていることがわかるのである。

では、「タラ」「ソシタラ」を含む発話文は、情報の種類とどのように関わっているのだろうか。これは、先に 4. で観察したタラの 4 用法を前後件の述語のアスペクトに注目して観察することにより明らかになる。表 1 を参照すると、「タラ」の 4 用法(①動作と状態を結ぶ「発見」、②継続的状态と動作を結ぶ「発現」、動作と動作を結ぶ③「反応」④「連続」)は、図 3 のように図示できる。

図 3 から、「発見」と「発現」は、それぞれ「動作 → 状態」、そして「(継続的)状態 → 動作」の順番で前景情報と後景情報をつなぐことがわかる。順番は逆であるが、どちらも、「話の筋を推



① 発見(動作—状態) ② 発見(状態—動作) ③ 反応(動作—動作) ④ 連続(動作—動作)
 注：矢印は時間の経過を表す。黒丸は、完結性のある動作を表し、矢印のついた点線は一定の時間に互る状態を表す。C1は前件述語、C2は後件述語。

図3 前後件の述語アスペクトの組み合わせ

し進める出来事と、それに共存する状態」を一つの発話文で表現するものである。6-2. では、「前景」と「背景」の関係を中心に、この二用法の使用場面・動機を考察したい。

一方、「反応」と「連続」は、二つの前景情報をつなぐのに使われていることがわかる。6-3. では、これらを対象に、同じ前景情報を構成するテ形による接続と比較しながら、談話における使用動機について考察を進める。

6-2. 後景情報と前景情報の結びつけ——「発見」と「発見」

6-2-1. 発見用法——認識主体の視点を通した、語り世界の背景の更新

発見用法は、前件の動作をした後に、その動作が終了した時空間と同一時空間に存在している状態、あるいは、同一時空間で進行している動作を新たに認識した、ということを表すものである。このタラを使うことで、今まで認識されていなかった背景に注意を喚起させ、前景情報となる動作を、その動作発生前から存在しており時間的に共存していた背景の中で、捉えさせることができる。またそれにより、以後の動作がこの背景の中で行われるということを明示できる。

例えば、資料の05-07「電車に乗ったら、(中略)一車両に数人しか座ってなかった」では、タラを境に前景情報から後景情報へ移行し、「(主人公が)乗る」という行為に続き、後件の「(乗客があまり)座ってなかった」という、主人公の視点から捉えられた背景が提示される。しかし実際は、その背景は、前件動作の発生前に既に存在していたものである。そうした「同じ時空間に共存していた」という場面の関連性を示すことで、背景が、前件動作との連続性をもって更新される。そしてこの更新された「主人公が乗っている、空いている電車の中」という背景は、そのまま以後の前景情報(本例ではおじさんのスリ行為)が行われる背景ともなるのである。また、55-56の、「おじさんがパーって見回したら(中略)あたしが一人ぼつんと立ってるもんだから」も、「見回す」という動作の前に成立している「立っている」という背景を持ち出すことで、前件の行為が後件の背景の中で行われていたことを認識させ、更に話の筋を進行させるその後の動作の連続(57: やってくる → 58: 言う)を、「おじさんと私がいる場面」という、「私」を入れた背景の中で捉えさせることができるのである。

以上のように、発見用法のタラを使うことで、話し手は聞き手に、前件動作との連続性をもって物語世界の背景を更新させることができる。聞き手は、語り手の描写の順番を追って、「語り手の世界の人物」という後件の認識主体の視点から、語られる世界の背景を刻々と更新するのである。これが、発見のタラの体験談の語りにおける効果であり、使用動機であると考えられる。

6-2-2. 発現用法——注目動作の始動と衝撃的な場面の認知

一方、発現用法の使用動機は、前件で描かれた背景の中で、注目すべき動作(前景情報)が始動したことを認知した、という「注目動作の始動」を表すことであると考えられる。また、背景の中で前景情報を提示することで、劇的に前景情報を提示する効果も生むことができる。

資料 19-21 の、「見てたんです。そしたら(中略)落としたんですよ」では、「私」の存在が後景情報として描かれ、その背景の中で始動したおじさんの動作が描かれている。そのおじさんの動作は、24 以下で前景情報として描かれる「不審なおじさんのスリ行為」の始まりを表すものでもある。また、68-69 の「絶体絶命と思ってたら駅のホームにいた駅員さんがゴミ箱を探して」も、語り手(=「私」)の苦境を背景として、その苦境を救う駅員の動作の発現が表現されている。本例でも、背景の中から発現した動作は注目すべきもので、以降の話の流れを左右する重要な点となっている。このように発現用法は、前件で描かれる背景の中で始動した、話の筋を前進させる新たな動作を、後件で描写するものである。そして、その注目動作の発現は、「劇的」という印象を伴う。実際、本稿で扱った他のデータを観察しても、状況に新たな変化をもたらす劇的な場面でこのタラが使われている場合がほとんどである(また渡邊 1996: 37-49 でも、日本語母語話者の談話では「逆接展開場面」でこのようなタラが使用されることが多いと報告されている)。この「劇的な場面」を描写するのにタラが使われるのには、6-3-2. で述べる、タラの統語的・意味的性質が生み出す「意外性」という性質が深く関与していると思われる。しかし更に、人間が劇的な場面を認知し、言語化する時の談話構成に対する意識もまた、関係していると思われる。

超常体験の語りを分析対象としたウーフィット (1998) では、語り手は、劇的な場面で、「X その時 Y」(X は状態の表現、Y は超常現象。例えば「私たちがゲリラの写真をとっていると、その時突然銃声がこえました」(p. 141)) のような文型を使うという観察がある。ウーフィット (1998) では、「劇的な場面を想起する時、何か重要なことが起こる前の平凡な状況についても記憶されてしまうのは、人間の認知のあり方に共通した、一般性を持った傾向である」という説に反論し、それを一歩進めて、次のような説明を行っている。「たまたまその活動をしていて、その後には異常なことが起こったために、その活動が語られるのではない。むしろ、そうした活動は、その後には起こる出来事によって意味付けられる話し手の体験の特徴を高めるために描写されているのである。」(p. 149)

体験談とは、事の顛末まで全て知っている語り手が、意味ある情報を取捨選択し、それを伝え

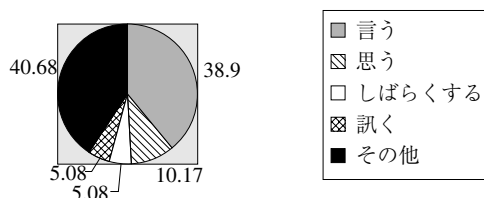


図4 反応のタラの前件述語 (%)

る言語形式を選別し、聞き手に伝達するものである。語り手は、何が重要な情報で、どこで話の流れが変化するかを知っている。ウーフィット(1998)の説明は、人間の認知のあり方と言語表現との関係の考察から一歩進めて、語る内容の全てを知っている「語り手」の談話構成への意識を問題にした点で興味深いものがある。日本語母語話者が、この注目動作の始動の認知を表現する場合、それに先行して存在する状態を叙述すること、つまり、発現用法の「タラ」を用いる動機も、同様なものではないかと思われるのである。

以上、発見・発現両用法に見られる「前景情報を成す動作を、背景とのつながりの中で表現する」という性質は、「タラ」「ソシタラ」に特徴的で、体験談の談話の中でこれを使う重要な動機になっていると思われる。

6-3. 時系列に連続して生起する前景情報の提示——「反応」と「連続」

6-3-1. 反应用法——「主語転換」を伴う継起的動作

3. で述べたように、継起的な動作連続を描写し、前景情報を言語化するのであれば、継起的動作をつなぐ「テ形」を使えば十分なはずである。しかし(4用法の中での頻度の高さを考えても)、反应用法のタラは、テ形とは異なる機能を担っているがゆえに、用いられていると予測される。では、反应用法のタラとテ形の差異は何であろうか。

結論から述べると、反应用法のタラの使用動機は、主に「主語が異なる完結性のある動作の連続を叙述する」ところにあると思われる。つまり反应用法は、完結性のある動作の「主体」をタラの前後で変え、話の筋を進めるのである。では、タラで結ばれる、主語交替をもたらす動作の連続というのは、どんな内容の動作なのだろうか。図4は、反应用法の59例を対象に、前件の述語として選択された動詞の種類を表したものである。

図4から、前件述語として、「言う」が約39%を占めていることがわかる。更に「訊く」「答える」「話す」も入れると、発言を意味する動詞は47.46%と半数近くにのぼる(それ以外は目立って頻度が高いものではなく、「思う」が10%程度(6例)あるだけである)。つまり、このことは「発言という行為を契機に、前件主語とは違う後件主語が、何らかの動作をした」という場面を描写する時に、「タラ」がよく使われることを示している。

この傾向は更にデータを増やして検証する必要がある。しかし、この、発言を意味する動詞が高頻度で使われるという結果は、それほど不思議な結果ではないと思われる。登場人物が複数いる場合、相互作用が生まれるのは自然なことであろうし、また、発言という行為が他の登場人物の反応を呼び起こすことも容易に想定できるからである。では、発言という行為により喚起されるのはどんな行為なのだろうか。

本稿では、「発言により喚起される異主体の反応の種類」を明らかにするために、更に、前件述語に発言の意味を持つ動詞をとる反応用法のタラ(28例)の、後件の動詞を調べた。その結果、後件に同じ「発言の意味を持つ動詞」が選択されている例が15例と、半数以上あり、残りの13例の後件述語はそれぞれ、全く異なった意味の動詞であった。この結果から、反応用法全体59例中、15例と、約25%が、「Aが～と言ったらBが…と言った」(あるいは「Aが～と言った。そしたら、Bが…と言った。」)のような、異主語による発言の継起的連続を表す描写——つまり、登場人物の発言を引用した、会話部分の描写——となっていることがわかる。

確かに反応用法のタラは、発言だけでなく他の様々な行為をつないでいる。しかし、この会話描写に使われるタラについて若干言い添えるなら、これは「会話に話者交替が必須である」という現実世界のあり方の反映であると言えよう。本質的に、会話というものは、発言権を交替させながら発話者が交互に発話をすることで成り立つものである。会話という行為を言語情報化する際に、それに適した反応用法のタラという道具(言語表現)が選ばれているのである。

以上、前後件の述語の観察から、タラが多く使われる状況(タラで叙述すべき場面)の一つが明らかになった。ではここで、会話以外の行為と行為をつなぐのにもなぜタラが使われるのかを探るべく、タラとテ形との比較に立ち戻って考えてみたい。

主語が変わる動作の連続の描写には、実はテ形を使うことが可能な場合もある¹¹。資料78-79から採った例(1a)と、タラの部分をテに変えた(1b)を参照されたい(省略されたφの部分には、発言の意味を持つ「言う」等の動詞があることが予想される)。

(駅員が)「オッチャン、オッチャン、これオッチャンのかいな」って

(1a) 言ったら / (被害にあったおじさんが)「あーそれわしんじゃあ」ってφ

(1b) 言って / (被害にあったおじさんが)「あーそれわしんじゃあ」ってφ

(1b)は、(1a)とはニュアンスの差はあるものの統語的には許容できる文である。だとしたら、この「ニュアンスの差」こそが、「体験談の語り」においてタラを使う動機になっていると予想できる。次節ではこのニュアンスの差に注目し、引き続き、テ形との違いを検討してみたい。

¹¹ 全ての反応用法のタラがテ形で置換可能なのではない。例えば「何すんのかなあと思ったら、彼、部屋に猫連れてきたんですよ」などはテ形で置き換えることはできない。

6-3-2. 連続用法——「意外性」という語り手の「評価」の表示

連続用法は、前後件とも同じ主語による継起的な動作連続を表すものである。そしてこれは、他の3用法と比べ、継起的な動作連続を表し話の筋を進める「テ形」と一番良く似た統語的性質を持つ。テ形と異なるのは、後件動作が無意志的な意味を持つものに限られるという点のみである。しかしこの「無意志的」という性質こそが、他のタラの用法と同様、後件に対する話者のコントロール不可能性を表し、「意外性」を表示しつつ話の展開を語るという、話者の談話構成の仕方に直結する¹²。その意外性とは、体験談を構成する事柄をどんなものだと捉えて聞き手に提示するか、という話者の「評価」を表したものであり、話者の心的態度の顕れである。

以下、連続用法の「タラ」((2a): 資料 34-36 より)と、「タラ」の部分を経起的動作を表す「テ形」で置き換えた例((2b))を比較する。

(2a) 車掌さんに「スリ見ました」って言った~~ら~~ / (中略)「車掌室に来て下さい」って言われて / 車掌室に行ったんです。 //

(2b) 車掌さんに「スリ見ました」って言って / (中略)「車掌室に来て下さい」って言われて / 車掌室に行ったんです。 //

確かに、(2b)も、許容できる発話複文である。しかし、テ形を使用すると、タラの持つ「後件の主語が、前件の主語には予測不可能・コントロール不可能なことを言った。それは意外だ。」という含意が表示されず、予定調和的な動作の連続に聞こえてしまう。この印象は、後件の無意志性により前後件に因果関係が存在するという読み傾いてしまい、前件から後件が導かれることは「意外」ではなく、むしろ因果関係があるため「当然」という解釈がなされることに依拠するものであろう。(2b)も、反応用法の(1b)も、動作の連続は示していても、その連続に対して語り手がどう思ったか、あるいは、これをどんな事態として描写しようとしているのか、という「語り手の意識」は顕れていないのである。

4. で述べたように、この「後件述語のコントロール不能」という性質は、反応・連続用法に限った性質ではなく、発見・発現の用法も含めた、タラ・ソシタラの発話文全てに存在するものである。語り手は、タラを使うことにより、実際は事の顛末まで全て知っている話を「意外だ」という話者の評価を込めて展開させることができるのである。つまり話者は、自分が全て知っている過去の出来事を語るのに、「何が起こったか」という必要最低限の描写に止まらず、「起こったことに対してどう思ったのか」ということもタラで併せて表示しつつ語るのである¹³。この評価を表す話者の心的態度は、他にも評価副詞である「何と」「生憎」、連語的な「驚いたことに」「幸

¹² 事実的な「ト」の後件述語が持つ「コントロール不可能」という性質が、意外性という評価的意味を生む、という考察は既に Fujii (1992) でなされている。

¹³ 前田 (1998) でも、事実的なトとの比較において、タラのこのような性質の指摘がなされている。

いにも」、また、接続詞「トコロガ」や文末のモダリティ等でも表すことができる。しかし、タラやソシタラは、述語のアスペクト、あるいは主語の異同の点で異なる節同士・発話文同士をつなげ、命題の叙述と評価を同時に行うことができるのである。Labov (1972) が narrative を構成する要素として重要視した「評価」を示しつつ、話を語る、というこのタラの性質こそが、タラを使う最大の動機であり、体験談の語りの談話で「テ形」「デ」の類に次いで「タラ」「ソシタラ」が多く使用される原因になっていると思われる。

7. ま と め

本稿では、限られたデータではあるが、まず数量的な分析により、体験談というジャンルの談話においてどんな接続詞・接続辞が場面と場面を結ぶものとして使われているのかを示した。また、そのうち使用頻度が2番目に高い「ソシタラ」「タラ」に注目し、統語的・意味的性質の観点から、それらの性質に反映された「体験談」の情報構造を探り、体験談におけるそれらの使用動機について考察した。本稿は、体験談を構成する表現が表す情報に焦点を当て、その使用動機を探るという方向から、情報とその言語表現化との関係の考察を試みたものである。

韓国語・中国語・ドイツ語を母語とする中上級の日本語学習者と、母語話者のストーリーテリングについて比較考察した渡邊 (1996) の研究では、学習者の談話には、事実的なタラの出現頻度が低いことが報告されている。また、Fujii (1993) でも、同じ絵本を見て母語話者が皆、事実的な「ト」で描写する場面でも、「ト」を既に学んだ学習者の narrative には、それが観察されなかったことが述べられている。このような状況は、道具は持っており、その効果は知っているものの、それを最大限に生かせる場(文脈)を知らない状況と似ている。こうした状況の下で学習者に必要なのは、何を描写する時にどの言語表現を使えばいいかという知識であると思われる。一方、言語素材を教授する教師に必要なのは、使用動機という観点から、当該の文法項目を捉え直すことではないだろうか。

本稿は、体験談の語りという限られたジャンルの談話に限定して考察を行ったものであり、データの種類による偏りなど、自ずと限界もある。しかし、ある種類の談話の構成要素を明らかにし、それを「どんな動機の下に使うのか」「他のものではなく、それを使わねばならない理由は何か」という観点から分析すれば、当該の談話の情報とその言語表現化についての示唆が得られ、それを教育に還元できる可能性も出てくると思われる。今後はそうした観点から、更に分析を進めていきたいと思う。

謝 辞

本稿をまとめるにあたり、東京大学大学院総合文化研究科の藤井聖子先生、大堀壽夫先生に、丁寧な御指

導をいただきました。また、本誌匿名の査読者の先生方、並びに東京大学談話分析研究会の皆さんに有益なアドバイスをいただきました。ここに記して深く感謝いたします。

参 考 文 献

- 有賀千賀子 (1993) 「対話における接続詞の機能について——「それで」の用法を手がかりに——」, 『日本語教育』79号, 日本語教育学会, 89-101.
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現——』, ひつじ書房.
- 庄司恵雄 (2001) 「日本語学習者のストーリーテリングは語彙選択から見て日本語母語話者とどこが違うか」, 『群馬大学留学生センター論集』1, 1-12.
- 泉子・K・メイナード (1997) 『談話分析の可能性 理論・方法・日本語の表現性』, くろしお出版.
- 田窪こずえ (1998) 『日本語の接続表現の談話機能——節タイプと grounding——』, 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻修士論文.
- 蓮沼昭子 (1993) 「「たら」と「と」の事実的用法をめぐる」, 『日本語の条件表現』, くろしお出版, 73-97.
- 浜田 秀 (2001) 「物語の四層構造」, 『認知科学』vol. 8 no. 4, 日本認知科学会編, 共立出版, 319-326.
- 前田直子 (1998) 「非仮定的な事態を接続するト・タラ文の意味・用法」, 『東京大学 留学生センター紀要』第8号, 東京大学留学生センター, 71-88.
- 増田真理子 (2001) 「〈談話展開型連体節〉—「怒った親は子供をしかった」という言い方」, 『日本語教育』109号, 日本語教育学会, 50-59.
- 南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』, 大修館書店.
- 李 麗燕 (2000) 『日本語母語話者の雑談における「物語」の研究』, くろしお出版.
- 林 淑璋 (1999) 「会話分析と談話標識——「で」「だから」を手がかりに」, 『言語情報科学研究誌』第4号, 東京大学言語情報科学研究会, 335-358.
- ロビン・ウーフィット (1998) 『人は不思議な体験をどう語るか 体験記憶のサイエンス』, 大修館書店(大橋靖史・山田詩津夫訳).
- 渡邊亜子 (1996) 『中・上級日本語学習者の談話展開』, くろしお出版.
- Berman, Ruth A. and Slobin, Dan I. 1994. *Relating Events in Narrative: A Crosslinguistic Developmental Study*. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Fujii, Seiko Y. 1992. On the Clause-Linking TO: Construction in Japanese. In Clancy, Patricia (ed.), *Japanese / Korean Linguistics II*. Cambridge: Cambridge University Press. 3-19.
- . 1993. The Use and Learning of Temporal Clause-linkage in Japanese and English. In Kettemann, Bernhard & Wieden, W. (eds.), *Current Issues in European Second Language Acquisition Research*. Gunter Narr Verlag: Tübingen. 279-291.
- Hopper, Paul J. 1979. Aspect and Foregrounding in Discourse. In T. Givon (ed.), *Syntax and Semantics. Vol. 12: Discourse and Syntax*. New York: Academic Press. 213-241.
- Labov, William and Waletzkey, Joshua. 1967. Narrative Analysis: Oral versions of personal experience. In June Helm (ed.), *Essays on the Visual and Verbal Arts*. University of Washington Press. 12-44.
- Labov, William. 1972. The transformation of experience in narrative syntax. In *Language in the Inner City*. Chapter 9. Philadelphia: University of Pennsylvania Press. 354-396.
- Maynard, Senko K. 1989. Chapter 5, Casual narrative in conversation. In *Japanese conversation: self-contextualization through structure and interactional management*. Norwood, NJ.: Ablex. 98-133.
- Reinhart, T. 1984. Principles of gestalt perception in the temporal organization of narrative texts.

Linguistics 22. Mouton publishers. 779–809.

Slobin, Dan I. 1996. From “Thought and Language” to “Thinking for Speaking”. In John J. Gumperz and Stephen C. Levinson (eds.), *Rethinking Linguistic Relativity*. Cambridge: Cambridge University Press. 70–96.